

(24) ネギ
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名												注 意 事 項	
			萎 凋 病	疫 病	黄 斑 病	黒 斑 病	さ び 病	小 菌 核 腐 敗 病	白 絹 病	軟 腐 病	べ と 病	苗 立 枯 病 R	ボ ト リ チ ス 葉 枯 症			
アフェットフロアブル	ベンチレト	7				◎	◎	◎	◎							
アミスター20フロアブル	アゾキシトリン	11			◎	◎	◎					◎				さび病, べと病では高温多湿条件下での使用をさける。
アミスターオブティフロアブル	アゾキシトリン・TPN	11・M05			◎	◎	◎	◎				◎				
アリエッティ水和剤	ホセチル	P07		◎								◎				
オリゼメート粒剤	プロパナゾール	P02									◎					
オロンディスウルトラSC	オキサリピリン・マンゼプロパゾール	49・40										◎				
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3				◎	◎									
カスミンボルドー カップーシン水和剤	カスカマイシン・塩基性塩化銅	24・M01									◎					
カセット水和剤	オキシニック酸・カスカマイシン	31・24									◎					
カナメフロアブル	インビルキサム	7				◎	◎			◎						
カーニバル水和剤	シメトルフ・TPN	40・M05				◎	◎					◎				
カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤	ベンチアハリカルボキサゾール・マンゼプロ	40・M03				◎						◎				
サブロール乳剤	トリホリン	3					◎									
ザンプロDMフロアブル	アメクトラジン・シメトルフ	45・40										◎				
シグナムWDG	ヒラクロストロビン・ホスカリト	11・7				◎	◎					◎				
ジマンダイセン水和剤	マンゼプロ	M03				◎	◎					◎				
スターナ水和剤	オキシニック酸	31									◎					
ストロビーフロアブル	クレソキシムチル	11			◎	◎	◎									
スマレックス水和剤	プロシトリン	2							◎							
セイビアーフロアブル20	フルシオキシニル	12							◎	◎						
ダイナモ顆粒水和剤	アミスルプロム・シモキサニル	21・27										◎				
ダコニール1000	TPN	M05				◎	◎	◎				◎	◎			
テーク水和剤	シメコナゾール・マンゼプロ	3・M03				◎	◎					◎				
ドーシャスフロアブル	シアゾファミト・TPN	21・M05				◎						◎				

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名											注 意 事 項		
			萎 凋 病	疫 病	黄 斑 病	黒 斑 病	さ び 病	小 菌 核 腐 敗 病	白 絹 病	軟 腐 病	べ と 病	苗 立 枯 病 R	ポ ト リ チ ス 葉 枯 症			
ト ッ プ ジ ン M 水 和 剤	チオファネートメチル	1	◎					◎								
ト リ フ ミ ン 水 和 剤	トリフルシール	3	◎													
ナ レ ー ト 水 和 剤	オキソニック酸・有機銅	31・M01								◎						
バ リ ダ シ ン 液 剤 5	バリダマイシン	U18							◎	◎			◎			
バ レ ー ド 2 0 フ ロ ア ブ ル	ビラジフルミト	7				◎	◎	◎	◎							
ピ シ ロ ッ ク フ ロ ア ブ ル	ビカルブトキサ	U17											◎			
フ ェ ン タ ジ ス タ 顆 粒 水 和 剤	ビリベンカルブ	11				◎	◎	◎								
フ ェ ス テ ィ バ ル C 水 和 剤	ジメモルフ・塩基性塩化銅	40・M01											◎			
フ ォ リ オ ゴ ー ル ド	メタラキシルM・TPN	4・M05											◎			
フ ル ピ カ フ ロ ア ブ ル	マニピリム	9						◎								
プ ロ ポ ー ズ 顆 粒 水 和 剤	ベンチアバリカルブイソプロピル・TPN	40・M05											◎			
フ ロ ン サ イ ド 粉 剤	フルアジナム	29						◎	◎							
ベ ジ セ イ バ ー	ベンチオピラト・TPN	7・M05				◎	◎	◎	◎				◎			
ベ ト フ ェ イ タ ー 顆 粒 水 和 剤	シモキサニル・ベンチアバリカルブイソプロピル	27・40											◎			
ベ ン レ ー ト 水 和 剤	ベノミル	1	◎					◎								
ポ リ オ キ シ ン A L 水 和 剤	ポリオキシン複合体	19				◎										
ポ リ ベ リ ン 水 和 剤	イミノタジン酢酸塩・ポリオキシン	M07・19				◎	◎	◎								
マ ス タ ピ ー ス 水 和 剤	シュートモナス ロゼシア	NC									野					野：【野菜類登録】
メ ジ ャ ー フ ロ ア ブ ル	ビコキシトロピニン	11				◎	◎	◎	◎			◎				
モンカットファイン粉剤20DL	フルトラニル	7							◎							
モンカットフロアブル40	フルトラニル	7							◎							
モンガリット粒剤	シメコナゾール	3						◎	◎							
ユ ニ フ ォ ー ム 粒 剤	アゾキシトロピニン・メタラキシルM	11・4					◎		◎			◎				
ヨ ネ ポ ン 水 和 剤	ニルフェノールスルホン酸銅	M01				◎	◎			◎	◎					
ラ リ ー 水 和 剤	マイクロタニル	3					◎									
リ ゾ レ ッ ク ス 粉 剤	トルクロホスメチル	14							◎							
リ ド ミ ル ゴ ー ル ド M Z	マンゼブ・メタラキシルM	M03・4											◎			
リンバー顆粒水と剤	フラトピル	7							◎							
レーバスフロアブル	マンジプロハミト	40											◎			
ロ プ ラ ー ル 水 和 剤	イプロジホ	2				◎		◎	◎						◎	
Z ボ ル ド ー	塩基性硫酸銅	M01									野	野				野：【野菜類登録】

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名											注 意 事 項	
			萎 凋 病	疫 病	黄 斑 病	黒 斑 病	さ び 病	小 菌 核 腐 敗 病	白 絹 病	軟 腐 病	べ と 病	苗 立 枯 病 R	ポ ト リ チ ス 葉 枯 症		

注) イミタジン酢酸塩とイミタジンアルベシ酸塩は、成分が「イミタジン」として取り扱われるので、使用の際は有効成分の総使用回数を超えないように注意する。

オ 病虫害防除法（ネギ）

（ア）萎凋病 *Fusarium oxysporum*

（防除のねらい）

本菌は種子伝染，土壌伝染するが，主に罹病残渣で生存した厚膜胞子，厚膜化細胞が根や茎盤部から侵入する。そのため，育苗中の根傷みや定植時・土寄せ時の根の切断は発病を助長する。また，本菌の生育適温は25～28℃であり，土壌が乾燥気味で発病が多くなる。地温が20℃以下で発生は急激に低下する。

（耕種的防除法）

- （1）苗床，本圃の発病地では連作を避け，できるだけ無病地に作付する。
- （2）発病株はほ場外に持ち出し適正に処分する。
- （3）育苗中は過度の乾燥状態や高温を避け，根傷みを起こさないように栽培管理を行う。

（イ）疫病・白色疫病 *Phytophthora nicotianae var.nicotianae*, *Phytophthora porri*

（防除のねらい）

疫病菌は土壌中で越冬するとされている。本病の生育適温は26～30℃で，比較的高温で多雨時に発生が多い。白色疫病も土壌伝染し，生育適温は15～20℃で冬季温暖で降雨が多い時に発生が多い。肥培管理の改善と育苗期からの防除が必要である。

（耕種的防除法）

- （1）連作を避ける。被害の多いほ場の近くでは栽培しない。
- （2）陰湿地を避け，ほ場排水をよくする。
- （3）堆肥を十分に施し，窒素質肥料を多用しない。
- （4）発病葉をほ場に放置しない。

（ウ）黄斑病 *Heterosporium allii*

（防除のねらい）

本菌の生育適温は15℃付近で，比較的低温で降雨が多い年に発生が多い。ネギの他，ニンニクが宿主となる。越冬は病葉部で菌糸や分生胞子の形で行われ，育苗中の幼苗や定植後の栽培株での発病は越冬分生胞子が飛散して第一次伝染源になると考えられており，葉の病斑上で分生胞子により，容易に周辺株に伝搬することから初期防除が重要である。

（耕種的防除法）

- （1）収穫時の皮むき等の発病残渣は伝染源となる可能性が高いので適正に処理する。
- （2）多発ほ場では連作を避ける。
- （3）ネギ，ニンニク以外の作物で輪作を行う。

（エ）黒斑病 *Alternaria porri*

（防除のねらい）

降雨が多い場合に多発し，梅雨期と初秋季に発病が多い。肥料切れの場合や生育後期に草勢が衰えた場合に発生しやすいので，肥培管理に注意する。

（耕種的防除法）

- （1）肥料切れをさせない。
- （2）排水を良好にする。
- （3）収穫後は被害葉を集め処分する。
- （4）健全種子を用いる。

（オ）さび病 *Puccinia allii*

（防除のねらい）

冬胞子や夏胞子の形で罹病植物体上で越冬する。春季から秋季にかけて発生するが，夏季には一時終息する。ネギに寄生するさび病菌はネギ，タマネギに寄生性が強く，ラッキョウに対しては弱い。ラッキョウに寄生する菌はネギに対する病原性は弱い。草勢が衰えると被害がひどくなるので，肥培管理に注意する。

（耕種的防除法）

- （1）堆肥，石灰を十分に施す。
- （2）ネギ類の発病ほ場近くに栽培しない。

(カ) 小菌核腐敗病 *Botrytis squamosa*, *B.cinerea*

(防除のねらい)

本病は土壤中に残った菌核が伝染源となる。地表面に現れた菌核上に分生子が形成され、これが飛散して伝染する。また、土壤中の菌核から直接菌糸が伸びてネギに侵入する場合もある。適温は20～25℃である。初期防除を行う。

(耕種的防除法)

- (1) 連作を避ける。
- (2) 被害残渣はほ場に埋めずに、ほ場外に持ち出す。

(キ) 白絹病 *Sclerotium rolfsii*

(防除のねらい)

被害部から落下した菌核や被害株菌糸が土中に残存して伝染源となる。多犯性の病原菌で、ウリ科、ナス科、ニンジン、フキなどを犯すが、イネ科作物にはほとんど寄生しない。外葉の倒伏等をできるだけ防止し、初期防除を行う。

(耕種的防除法)

- (1) イネ科作物と4年ぐらい輪作を行うか水田転換を行う。
- (2) 健全苗を植え付ける。
- (3) 罹病株は周りの土とともに除去する。

(ク) 軟腐病 *Erwinia carotovora* subsp. *carotovora*

(防除のねらい)

低湿地、連作地に発生しやすく、雨天が続くと発生が多くなる。本病原菌はダイコン、ハクサイ、トマトなども犯す多犯性の土壤伝染性病害で、ウイルス罹病株や害虫の食害痕は、本病の発生を助長するので適切に処理する。

(耕種的防除法)

- (1) 連作を避け、イネ科、マメ科作物と輪作する。
- (2) 被害株は除去する。
- (3) 排水を良くする。

(ケ) ベと病 *Peronospora destructor*

(防除のねらい)

ネギ、タマネギ、ワケギ、ノビルに寄生する。秋季に発病した株が冬を越すと、春季に多発することが多い。越冬罹病株の早期発見と早期防除が重要である。発病の少ないうちから薬剤散布を徹底する。

(耕種的防除法)

- (1) 健全苗を用いる。
- (2) 越冬病株の除去に努める。
- (3) 肥料切れさせないようにする。
- (4) 畑地では3～4年の輪作を行う。
- (5) 風通しや排水をよくする。

(コ) ボトリチス葉枯病 *Botrytis cinerea*, *B. squamosa*

(防除のねらい)

主に2種のボトリチス属菌によって起こる。病原菌は枯死した被害茎葉で菌糸や菌核の形で越冬し秋季の伝染源となる。冬から春にかけて温暖で多雨の年に発生が多い。トンネル栽培などで多湿の時に発生が多い。

(耕種的防除法)

- (1) 被害茎葉は除去する。
- (2) 多湿を避ける。

(サ) 萎縮病 OYDV

(防除のねらい)

病原ウイルスはネギ萎縮ウイルス（OYDV）でネギに発生し、タマネギの発病は少ない。寄主範囲はネギ、タマネギ、ニラ、ニンニク、スイセンが知られている。アブラムシによって媒介されるので、幼苗時からのアブラムシ防除を徹底する。

(耕種的防除法)

- (1) 伝染源となる病苗や苗床付近のノビル、ニラを処分する。発病株は早く除去する。
- (2) 移植栽培では育苗床を寒冷紗被覆し、アブラムシの飛来を防ぐと被害が少ない。
- (3) 白色テープの使用もアブラムシ飛来の減少に有効である。
- (4) 堆きゅう肥を十分に施す。

(シ) ネギアザミウマ

(防除のねらい)

5月および9月に発生が多く、7～8月に乾燥が続くと秋以降の発生が多くなる。植物組織内に産卵するが、蛹は土中に潜伏するので、防除は繰り返し行う必要がある。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(ス) ネギアブラムシ

(防除のねらい)

樹木の陰になったほ場で発生しやすく、初夏に多い。ひどい場合は枯死することもあり、べと病を併発して腐敗する。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(セ) ネギコガ

(防除のねらい)

ふ化幼虫は葉の中に食入し、内側から表皮を残して葉肉を食害する。幼虫の被害がひどい時はカスリ状の被害痕が目立ってくる。薬剤による防除は幼虫を対象に行うが、幼虫が葉の中にいるため防除効果があがりにくいので、幼虫発生期にふ化幼虫の食入防止をねらって行う。

(ソ) ヨトウムシ (ヨトウガ)

(防除のねらい)

葉の中に潜んでいることが多い。春、秋の年2回発生し、集団で加害するが大きくなると分散し、ハスモンヨトウと同様な被害を呈する。

キャベツの項参照。

(タ) シロイチモジヨトウ

(防除のねらい)

被害は8～10月にかけて多い。成虫は葉身に産卵し、ふ化幼虫は直ちに葉の中に食入し内側から食害するのでカスリ状を呈する。幼虫は生育が進むと分散し、老齢幼虫は葉を暴食する。葉の中にいる幼虫には薬剤の効果は期待できないので、ふ化幼虫の食入防止をねらって卵の時期に薬剤散布する。

(チ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

9～10月にかけてシロイチモジヨトウと同時に発生するので、両害虫の防除をねらって薬剤散布をする。シロイチモジヨトウは葉ネギでよく発生し、ハスモンヨトウは深ネギでよく発生する。

(ツ) ネギハモグリバエ

(防除のねらい)

年6回以上発生し、特に夏季の被害が大きい。薬剤防除も長期にわたって行い、特に成虫の発生最盛期あるいはその後1週間位の被害発生初期に重点を置く。また、発芽直後の幼苗期から加害するので、播種時からの防除を心がける。

(テ) タネバエ

(防除のねらい)

有機質肥料や植え傷み苗に誘引され、移植直後から発生するので、土壌処理など初期の防除が重要である。

(耕種的防除法)

被害残渣をほ場内に残さないようにする。

(ト) ネダニ

(防除のねらい)

ラッキョウや根深ネギなど栽培期間が長くなると被害が見られる。球根や根に寄生したものが翌春、高密度になって生育障害や腐敗を引き起こす。幼虫の一部はヒポプス（移動若虫）となって土壌中で長期間生存する。ヒポプスと球根や苗に寄生したものが発生源になるので、薬剤による土壌消毒を行う。

(耕種的防除法)

- (1) 石灰を施す。
- (2) スイカ、カボチャ、ダイズ、ソバ、ショウガなどを輪作する。